奥田満（吉岡史朗）同志、永井文弥同志の逝去を悼む

12月3日と4日、われわれは二人のかけがえのない同志を失った。

3日逝去した永井文弥同志は、69年秋、金沢大学教養部封鎖闘争に参加し、74年から非公然・地下活動を開始。05年に闘病のため公然化するまで31年間、一貫して対権力・対反革命ゲリラ・パルチザン戦争の最前線にたち続けた。激務の中でも絶えず自然体を保ちたんたんと任務を貫徹する姿は同志たちに常に大きな安心感を与えた。彼の市民社会に溶け込む能力は群を抜いていた。

4日逝去した奥田満（吉岡史朗）同志は、67年に学生運動、全学連運動に参加してのち、69年、70年には、京大・立命館大学の全共闘のバリケード攻防に参加。74年1月から98年まで24年間非公然活動に従事、対カクマル戦争と三里塚・天皇決戦を先頭で闘った。3・11以降は倒れる直前まで、反原発闘争の先頭に立ち続けた。

われわれは深い悲しみを乗り越え、2同志の遺志を引き継いでプロレタリア世界革命の勝利を実現することを誓う。

二同志の遺志を継いでたたかう

浅田 洋二

12月初め、二人の大事な同志がたてつづけに斃れた。あれから一週間以上経つが、まだ力が抜けていた。だから会う時は緊張感があった。話すとだんだん緊張も解けるが。そういう同志の力は日々の生活でも重要で、僕はその恩恵にあずかった。

健康の維持に人一倍努力を重ねていることも他の同志から聞いた。そんな彼が、皮肉にも同年代の同志たちの中で先に病魔にむしばまれてしまった。それでも一度は打ち勝ったのは、執念のなせる技だった。

数年前、最初の手術がうまくいかなくて容体がかなり悪いことを吉岡さんから聞き、すぐ見舞いに行った。本当に苦しそうで、もう次は会えないのではないかと思った。病院を出て涙が止まらなかった。しかしそこから奇跡的な生還を果たし、その後は重要な任務も果たしてきたのは、多くの同志が知るところだと思う。永井同志は闘病に勝利し、革命運動をやり抜いたのだった。

階級的裏切りへの怒り

史朗さん。僕たちは吉岡同志のことをこう呼んでいた。史朗さんとは、僕の運動への関わりの最初から今まで20年以上のつきあいだった。二人で居た時間も結構あった。市役所前のテントでは、いつでも会えたので、最期までずっと一緒にたたかい、一緒によく飲み、いろいろ教えてもらったように思う。

20代の頃、印象に残っているのは、裏切り、権力へ売ることが最も恥ずべき階級的犯罪であるということだった。当たり前のことだが、どこで話したことかも含めて強烈に残っている。

「岩波文庫の『エストニアの壺』というのを読んだらいい」と聞いた。早速探しに行くとそんな本はなく、「エトルリアの壺」だった。権力への売り渡しは親子の間であっても許すことができないという話だったと思う。こういう話を聞いたからということだけではなく、彼をはじめ僕の周りにいた同志のたたかいが、実践で階級的裏切りは許さないと教えてくれた。

第2の3・14直前、与田らが、史朗さんをスパイ呼ばわりして処分を企んだが、僕たちは一笑に付した。そういうことを言う者が権力に屈服しているのは当然のことだった。かくして3・14決起となった。その後、分裂過程で安田派は、彼の足を引っ張ることで団結破壊を試みたようだったが、全くの逆効果でしかなかった。

不機嫌になるな

史朗さんが不機嫌であったことは見たことがない。最後のテントで、ある青年に、在特会への怒りがないと激しく怒りをぶつけていたことがあった。半端ではない怒りの表現だった。誤解をおそれずいえば、在特会に対する怒りより激しかったのではないか。テントで闘おうとする者がそんなことでどうするのかとの怒りだったのではないかと思う。

ところで、ストレートに〈怒りを表現する〉のと〈不機嫌になる〉のは、全く違う。そこをとことん重視した人だった。

ある指導部が怒りのあまり明らかに不機嫌になっていた。次の予定を「俺はもう行かない」と言った。史朗さんは厳しく注意した。「指導部が不機嫌になることは絶対許さん。そうなったらみんな何も言えなくなるんや。怒りはいい。でも不機嫌にはなるな」。これを実践的にというか自然に貫いている人だったので、誰もが何でも話せたのではないかと思う。

分裂前に杉並選挙でも、天田書記長に「仏頂面をするな」と言っているのも聞いた。天田氏は「にこにこしていられるか」と全くその趣旨を理解できなかった。

共産主義を体現

組織的力ということもよく話していた。1＋1＝2ではなく、3にも4にもなれるということを、わが党はまだ誰も実感できていないのではないかと。指導部が許せないということをバネに頑張ることがある。見返してやる、という思いで力を出しても、それは豊かな力ではない。継続しない。本当にみんなが力を出せるようなもの、実感できるたたかいを何とかやりたい。そう言っていたのは、裏切り、牢ぐって吉岡さんが語っていた「ある時は黒子になり、ある時は先頭にたつ」「脱原発の闘いを一回転させるのが今日のコミュニストの役割だ」を断固受け継ぎたいと思います。

時あたかも総選挙、最大のテーマは3・11以降1年9カ月、この社会をどう造り替えるか、脱原発へ階級闘争を一回転させるかだと思います。すべてのみなさんが、このぎりぎりの時期に、共通の思いを胸に、当面の2013年8月（大飯3・4号機の点検・停止、参院選）までの過程を吉岡さんとともに闘いぬこうではありませんか。

心が千々に乱れ、十分意をつくしたメッセージにはなりませんが、私も革命家・吉岡史朗の「さあ跳べ、ここがロドスだ」の精神を受け継ぎ、がんばりたいと思います。

仲間のみなさん。ともに手をたずさえ、がんばりましょう。

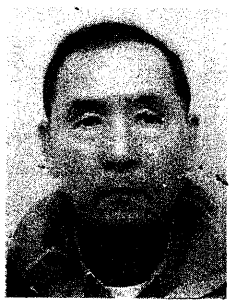
吉岡史朗さん。最後まで私たちを見守っていて下さい。

2012年12月7日

奥田満（吉岡史朗）同志　略歴

1949年3月14日、名古屋市に生まれる。
1967年、予備校生として立命館大学の学生運動に参加。
1974年1月から1998年まで24年間、非公然活動に入る。
2011年9月11日から12年11月20日まで、経産省前テントひろばを皮切りに、大飯原発再稼働反対監視テント、北九州ガレキ焼却反対大阪市役所前テントに参加し、反原発闘争の先頭に立ち続ける。
2012年11月27日、脳内出血で倒れる。12月4日、永眠。享年64。

（金沢）



永井文弥同志　略歴

石川県辰口町（現能美市）出身。1962年、石川県立泉ヶ丘高校入学。
1965年、金沢大学法文学部に入学。映画研究会に加入。
1969年秋、金沢大学教養部封鎖闘争に参加。以降、70年安保沖縄闘争へ
1974年　非公然・地下活動を開始。一貫して対権力・対反革命ゲリラ・
パルチザン戦争の最前線にたち続ける。
2005年　直腸がんが見つかる。余命3年と宣告される。
2012年11月21日、自宅で倒れ緊急入院。12月3日永眠。享年66。

（金沢）

「さあ跳べ、ここがロドスだ」

松田 耕典（大阪府警本部在監）

吉岡史朗さんは、1970年以来、くじけそうになった私をさまざまな場面でふるいたたせてくれた指導者であり、兄のような存在でした。幾多の場面が想い出されますが、近くは、06年3月14日の吉岡さんの姿は、私は生涯忘れる事はありません。

3・11以降の世界では、脱原発の闘いに全力を投じました。昨年9月には経産省前にテントがたち、10月末に私はそのテントに一泊し、語り合いました。

そして今年5～6月の大飯の闘い＝『オキュパイ大飯の乱』と、関電前、ガレキ反対・市役所前テントの闘いは、多くの若い世代にしたわれつつ、獅子奮迅する姿がありました。その闘いの渦中で無念の死。本当に残念でたまりません。

しかし、私は涙をぬ